

本年度の定期総会は6月19日に開催！！

2021年度第2回理事会が4月15日に行われました。協議の結果、日中国交回復50周年記念の意義を込めた「富谷市日中友好協会第27回定期総会」は6月19日(日)14時から町上会館で行うことになりました。

詳細は次号に掲載いたしますが、ご多忙とは思いますが予定に組み入れていただきますよう、お願いいたします。



TNC
通信
2022
5月号

「魯迅故居跡」公園として誕生



寅(トラ)の諺

「騎虎(きこ)の勢い」一虎の背に乗り走り出すと、勢いが激しくて降りられない、また降りてしまうと食べられる恐れがあり、降りられない事から一旦やり始めたら途中でやめられない譬え。(『隋書』)

1904年に魯迅が仙台医学専門学校に入学した折の最初の下宿(佐藤屋)跡を仙台市が取得したもので、コロナ過により1年開園が遅れたものの、4月1日「米ケ袋一丁目公園」として生まれ変わりました。(写真④)

残念ながら仮称案「魯迅公園」の名称でなく、併記でもありませんが、既存の郭沫若筆の「魯迅故居跡」の碑や、魯迅を紹介するパネル(写真⑤)や魯迅も使用したと思われる当時の井戸(写真⑥)、庭にあったケヤキも残されています。



「植林交流でのふれあい」

副会長・松田勝幸

宮城県日中友好協会による吉林省への植林活動は2014年から15年間続きました。私も日中の友好と地球環境を守るという使命感から参加。中でも3回目となった

農安県は2017年4月17日から5日間、副団長という重責を背負いながら妻と参加しました。新潟へバスで移動し、新潟・ハルビン便そして高速鉄道で長春へ向かいました。ホテルで吉林省対外友好協会の歓迎を受け、乾杯を重ねました。翌日は市内観光と自動車工場の見学、そして長春大学日本語学科の学生と交流を深めることができました。3日目は公安車両の先導により植林の現地・農安県へ移動し、植林活動を行いました。この地は砂が堆積し砂漠化されつつあります。植林した苗木が5年、10年後には大きく生長し砂漠化を少しでも食い止めることができればと思います。

日本と中国…顔かたち、そして文化もすごく似ています。中国の農村へ行くと、かつての日本を思い出します。でも様々な環境、立場は異なります。だからこそ相互の理解を深め合う交流の大切さを実感します。ウクライナでの紛争が続いています。お互いを尊敬し理解し合い、地球全体が住みやすい未来をつくりあげていきましょう。
※写真は交流団が担当する「日本友人」エリアで。さあ開始だ!!



『補遺・魯迅と松本亀次郎』

先月号の松本亀次郎に関して、魯迅との師弟のやり取りは不明、と記述しましたが「翻訳家としての魯迅とある日本語教師」という林敏潔・南京師範大学教授による論文が『東方』380号(2012年10月号、東方書店)に掲載されていました。

それによると、弘文学院で教えた松本氏は後年、岩波書店の雑誌『教育』で魯迅に触れている。抜粋すると「学生の中には先年死んだ魯迅その他秀才揃い。僕は他の講師の後を引き継いだので彼らの日本語は相当程度」と述べ「助詞の“に”を充てる漢字に“于”または“於”と黒板に書いたところ、魯迅は“于於”が何処でも全く同じではなく“に”にあたる場合が同音同義だからどちらか一字書けば正しい」と説明した。そして「日本語に適切な訳字を充てるのは難しいとして、“流石に”の適訳の漢字が思い至らない」と、魯迅が翻訳に細心の注意を払っていた、と述べ、後年の魯迅の翻訳を高く評価している。そんな師弟間に当時の日中間の教育景色を垣間見た思いだ。